

## 編集子からのプロローグ

【遊び】が人間活動の本質であり、生活に意味を与えるものと解釈したホイジンガの訳書を読んだ時、なにかしっくりこなかった。背広を着て温泉に入っている感じ。若年時に西洋ものに振り回されるのは、母国の宿命的な道程であるが、なぜか息苦しい感覚は正直忘れてはならないと財布のように大切にしてきた。やはり彼らは、一神教の不幸で身軽になれないのか。夷齋先生の江戸人の発想がヒントになり、ようやく【遊び】の深淵がわかり、スツキリした。河豚は世界中の人々が毒があることを知っており、料理の範疇に入れなかった。江戸人はふんどし一つになり、河豚に挑戦した。じわじわ科学の知識を蓄えながらも、最後は半か丁。生と死はひとつ。そして河豚料理は完成した。

われら三人寄っても文殊の知恵にはならないが、還暦過ぎてお互いつくづく顔を見合わせ、戦友という言葉、戦中派だけのものではないこと身にしみた。なに

をやってきたんだ。結局は【遊び】だったろう。仕事も学問も熟睡するのも遊び。味わい深い宝物は、今まで出会ってきた人たち。

「懐かしの水源池かね。早稲田にはなかったらう」

「俺も行って感心したね。学内のあのホップ園も良かった」

「今は昔だ」

こんなそんなで年の暮れに一冊編もうとなりました。北の大地に包まれた美しい池・・・池を地にして、【水源地】・・・これも【遊び】です。

二〇一六年 冬「水源地」編集部